

1920 年、朝鮮儒者の東洋大学訪問

佐藤厚

satou atsushi

【概要】

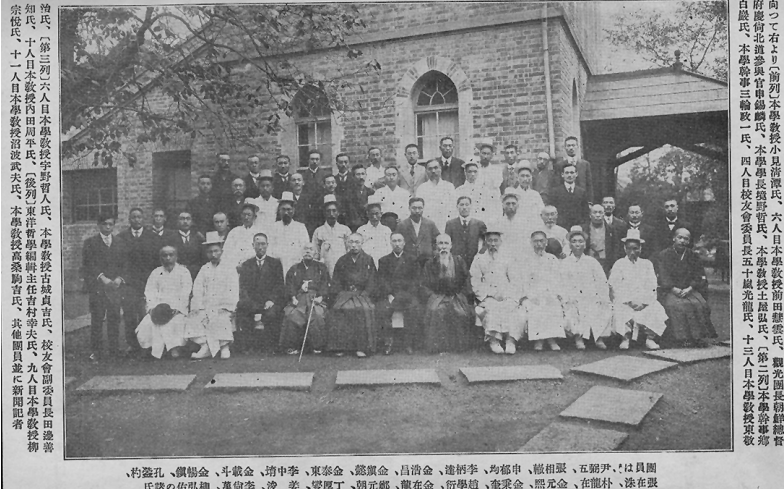
日本が朝鮮を統治下に置いた植民地時代、朝鮮総督府は、朝鮮人の日本同化政策として社会の指導者層を対象とした内地（日本）視察を数多く行った。その中の一つに 1920 年 10 月から 11 月にかけて行った慶尚北道儒林団による内地視察がある。この視察団は 9 都市 63 カ所を視察し、その中には東洋大学も含まれている。東洋大学では当時の境野学長を中心として彼らの歓迎会を行った。本論文では、資料をもとに歓迎会の模様を再現し、その背後にある東洋大学と朝鮮との関係を解明する。

1. はじめに

筆者の研究の関心の一つは近代における井上円了および東洋大学と朝鮮との関連である。これまで書いた論文では、1906 年と 1918 年に井上円了が行った朝鮮巡講⁽¹⁾、1914 年に留学した朝鮮人留学生・李鐘天⁽²⁾、1920 年代初めに存在した東洋大学朝鮮分校設立構想に関する論文⁽³⁾などがある。今回取り上げる題材は、1920 年 11 月に東洋大学を訪れた朝鮮の儒教団体についてである。

日本が朝鮮を統治下に置いた植民地時代、朝鮮総督府は、朝鮮人の日本同化政策として社会の指導者層を対象とした内地（日本）視察を数多く行った。その中の一つに 1920 年 10 月から 11 月にかけて行った慶尚北道儒林団による内地視察がある。この視察団は 9 都市 63 カ所を視察

東洋大學歡迎朝鮮儒林內地觀光團



仲氏、(第三列)六人日本大学教授宇野賢人氏、本學教授吉城貞吉氏、校友會副委員長田邊善如氏、十人日本教授内田周平氏、(第四列)東洋學編輯主任吉野次氏、九人日本本學教授宗悦氏、十一人日本本學教授高橋武夫氏、本學教授高橋勇吉氏、其他團員並に新聞記者

向つて右より(前列)本學教授小見清澤氏、六人日本本學教授前田藤堂氏、觀光團長朝鮮總督府庶務北道參事官申鶴氏、本學教授藤野氏、本學教授藤原氏、(第二列)本學教授白藤氏、本學事務三教一氏、四人日校友會委員五十嵐光龍氏、十三人日本本學教授東郷

均益孔、饒智金、斗敏金、清中李、東泰金、懿銀金、昌浩金、達哲李、均福申、梅相張、五野尹、(は貝岡、氏等の在列者)、萬山秀、津、差、松隈丁、朝宗郎、觀在會、衍學組、奎聚金、熙元金、在龍朴、漆在張

<写真1> 東洋大学で行われた慶尚北道儒林団歓迎会の集合写真(1920年11月1日)『東洋哲学』28-1

した。そして11月1日には東洋大学を訪問している。東洋大学では当時の学長・境野黄洋を中心に彼らの歓迎会を行った。<写真1>は、この時に撮影された写真である。

この時の歓迎会はどのように行われたのであろうか。また、視察団はどのようなコースをたどっていたのであろうか。そしてなぜ東洋大学を訪問したのであろうか。

本論文では、当時の記録を伝える資料をもとに、歓迎会の模様を再現するとともに、当時の東洋大学と朝鮮との関係について論じる。

本論文の意義は、東洋大学の歴史の一コマを明らかにすることであるが、同時に日本統治時代に大学を舞台として行われた日韓文化交流の具体的な姿を明らかにすることが出来ることである。これに関する先行研究はない。

2. 研究資料

「内地視察」とは、朝鮮総督府が朝鮮の人たち、中でも今回取り上げる儒者や教師など社会の指導者たちに日本の発展ぶりを見せることにより、日本に対する好感を呼び起こそうとした日本の意図が入った視察である。その総回数は、明確な研究がないためにわからないが、1920年代だけでも244回を数えるという(4)。これに1910年代、30年代、40年代を加えると、大分大きな数になるのではないかと想定される。

「内地視察」の性格について姜東鎮は次のように整理している。総督府がこれを本格化させたのは1920年代前半期の頃であり、その目的は「日本支配下で衰微していく植民地朝鮮と、第一次大戦の戦争景気で潤っていた日本を比較させることによって、朝鮮人に「日本の強大性」と「自立不能」を内容とする「独立不能論」を植えつける政治宣伝の意図から出た」ものであると述べる(5)。さらに視察団の役割を「観光団は総督府官吏の引率の下に予定の日程に従って行なわれ、一行には総督府の活動写真班が同行し、これを国内の政治宣伝に利用した。旅行者は帰国後は「報告演説会」を開く義務を課され、民衆に日本の「先進性」「強大性」を宣伝しなければならなかった。これは、当局が彼らをオピニオン・リーダーとして地方の親日与論の造成に役立たせようとするもので、御用雑誌『朝鮮』にはしばしばその報告会の記事が見られる。」と述べている(6)。

今回とりあげる内地視察は、1920年10月から11月にかけて慶尚北道(中心都市は大邱^{テグ})の儒者の人たちが、日本の9都市63箇所を視察したものであり、この中に東洋大学も含まれている。

この視察を伝える資料には次の3つがある。

- ①『慶尚北道儒林内地視察感想録』
- ②東洋大学の記録
- ③新聞記事

①は朝鮮で発行されたものである。内容は視察団の移動の記録と、訪

問した場所ごとに詠んだ漢詩をまとめたものである。表題には「慶尚北道儒林内地視察感想録」とあり、目次に掲げられた題目は「儒林内地視察感想録」である。奥付はないが刊行時期は、1920年11月頃と推測される。頁数は総ページ数が85頁で別表2頁ある。表記は漢字ハングル混じりで、ハングルの部分にはカタカナで日本語の意味が添え書きされる。この資料は国内では京都大学と東洋大学図書館にしか残っていない。東洋大学にある理由は、東洋大学が視察地に入っていたため、帰国後に朝鮮から贈られたものと推測される。

②は東洋大学が刊行していた雑誌『東洋哲学』28巻1号(1921年1月発行)である。そこには二つの記事がある。一つは歓迎会の様子を漢文で記録した内田周平「招邀朝鮮儒生記」である。内田(1854-1944)は、明治から昭和前期にかけての中国哲学者で、遠江(静岡県)出身。東京大学卒。号は遠湖。学習院講師、五高教授などを経て明治31年から哲学館教授になり、儒学、ハルトマン美学を教えた。昭和19年に91歳で亡くなった。著作に「寛政三博士の学勲」「遠湖文髓」などがある。当時の年齢は66歳である。もう一つの資料は、漢学の講師・土屋弘(鳳洲)(1840-1926)が儒者たちに歓迎の漢詩を呈し、それに対して翌日、儒者たちの中、17人が次韻して返詩した「与朝鮮儒林唱和詩」である。土屋は岸和田藩儒で勤王家であり、華族女学校と東洋大学の教授を務めた。また天皇に進講する宮中御講書始御進講を務め、大正15年(1926)に86才で没した。朝鮮儒者を接遇した時は80歳であった。

③は読売新聞(1920年11月2日付)、朝日新聞(1920年11月2日付)、毎日申報(1920年11月3日付)などである。

今回の発表では、主として『東洋哲学』に収録された内田周平の記事をもとに、朝鮮儒者たちと東洋大学の教職員との交流を再現する。まず『感想録』をもとに視察団員と視察日程について概観する。

3. 視察団員と視察日程

3-1. 視察団員および同行者

団長は申錫麟1名で、団員は22名、同行者は7名で総計30名である。『感想録』の記載から、それぞれの身分、住所、氏名（年齢）を<表1>にまとめた。

<表1>視察団員および同行者

	身分	住所	氏名（年齢）				
1	団長		申錫麟	18	同	北州郡北州面	趙学衍（30）
2	団員	大邱府	尹弼五（60）	19	同	同	柳弘佑（34）
3	同	同	張相轍（51）	20	同	閔慶郡	金在龍（51）
4	同	達城郡寿城面	申郁均（68）	21	同	醴泉郡豊壤面	鄭元慶（52）
5	同	同 城北面	李柄達（60）	22	同	榮州郡安定面	丁厚燮（39）
6	同	義城郡点谷郡	金浩昌（41）	23	同	奉化面乃城面	姜浚（52）
7	同	安東郡西後面	金鎮懿（65）			官職	
8	同	安東郡豊西面	金泰東（51）	24	同行者	大邱公立農業 学校長	福島百蔵
9	同	同 礼安面	李中埵（50）	25	同	朝鮮総督府道 書記	金秉泰
10	同	英陽郡立岩面	金載斗（43）	26	同	同	諸富覚一
11	同	盈徳郡丑山面	金暢鎮（67）	27	同	朝鮮総督府郡 書記	金泳華
12	同	慶州郡川北面	孔鏊杓（53）	28	同	同	盧炳龍
13	同	慶山郡慈仁面	張在洙（40）	29	同	同	金奎燮
14	同	清道郡大城面	朴龍在（36）	30	同	慶尚北道 雇 員	坂本三郎
15	同	星州郡聖巖面	金元熙（45）				
16	同	漆谷郡倭館面	李尚万（59）				
17	同	金泉面鳳山面	金秉奎（45）				

団員の多くは両班であり、社会の指導層であった。また後で内田周平の記事の中に出るが、彼らのような朝鮮時代の両班たちは植民地時代に儒道振興会や矯風会などの会を設立する。しかしこれらの団体は日本が後援した親日団体であった(7)。

3-2. 視察日程表

続いて視察の日程表を整理すると<表2>のようになる。

<表2>視察日程表

	月日	出発	到着	宿泊地	視察箇所
1	10.22	大邱 PM3:52		(船中)	
2	23			(車中)	
3	24		大阪 AM5:43	大阪	天王寺公園、市民博物館、新世界、朝日新聞社
4	25			同	造幣局、大阪城、築港、心齋橋筋、千日前、道頓堀
5	26	大阪、湊町 AM9:18	法隆寺 AM11:00		法隆寺
		法隆寺 PM4:37	奈良 PM4:39	奈良	
6	27			同	猿沢池、物産陳列所、春日神社、大仏殿、帝室博物館、興福寺
7	28	奈良 AM10:54	宇治山田 PM3:39	宇治山田	
8	29	宇治山田 PM3:40			伊勢大神宮参拝、徴古館、農業館
9	30		横須賀 AM8:46	横須賀	海軍航空隊、金剛艦、海軍工廠
10	31	横須賀 PM0:35	東京 PM2:45	東京	二重橋
11	11.1			同	靖国神社、遊就館、 東洋大学
12	2			同	王世子殿下御用邸、赤十字病院、斎藤総督邸、三越
13	3			同	後楽園、上野公園、昌平黉
14	4			同	新宿御苑、明治神宮参拝
15	5	東京 AM6:00	埼玉県高麗村往復	同	埼玉県入間郡高麗村、聖天院、高麗神社
16	6	上野 AM10:00	日光 PM2:40	日光	東照宮
17	7	日光 AM10:30	中禅寺 PM2:20	中禅寺	大猷殿、中禅寺湖、華厳滝
18	8	中禅寺 AM7:30	上野 PM3:40	東京	帝国製麻株式会社日光工場
19	9			同	帝国図書館、帝室博物館

20	10	東京 PM1:35	興津 PM7:32	興津	
21	11	興津 PM2:20	静岡 PM2:56		清見寺、農商務省興津園芸試験場、県立農事試験場
		静岡 PM7:03		(車中)	
22	12		京都 AM5:10	京都	桃山御陵参拝、乃木神社、東西本願寺
23	13			同	御所拝観、第一高等女学校、帝国大学、商品陳列所、インクライン
24	14	京都 AM7:50	厳島 PM10:00	厳島	
25	15	厳島正午		(船中)	厳島神社、大元公園、紅葉谷公園、千畳閣、五重塔
26	16		大邱 PM1:58		

以上を整理すると次のようになる。

まず訪問した都市は9か所であり、それは大阪、奈良、宇治山田、横須賀、東京、日光、興津、京都、広島である。続いて訪問場所は63カ所である。それを筆者の判断で次の14の分野に分類した。

第一に、天皇関係としては、二重橋（東京）、桃山御陵（＝明治天皇陵）参拝（京都）である。第二に、総督府関連としては、斎藤総督邸（東京）である。第三に神社、寺院関係としては、春日神社（奈良）、伊勢神宮（三重）、靖国神社（東京）、明治神宮（東京）、乃木神社（京都）、厳島神社（広島）、高麗神社、聖天院（埼玉）、東照宮（日光）、法隆寺（奈良）、大仏殿（奈良）、興福寺（奈良）、清見寺（静岡）、東西本願寺（京都）、五重塔（広島）がある。第四に朝鮮関連としては、王世子殿下御用邸（東京）がある。第五に繁華街としては、新世界、心齋橋、千日前、道頓堀（大阪）があり、第六に、百貨店としては三越（東京）がある。第七に、農業関連としては農商務省興津園芸試験場、県立農事試験場（静岡）があり、第八に、会社としては朝日新聞社（大阪）があり、第九に大学としては、東洋大学（東京）、帝国大学（京都）、第一高等女学校（京都）

がある。第十に病院としては赤十字病院（東京）があり、第十一に博物館、図書館としては市民博物館（大阪）、皇室博物館（奈良）、帝国図書館（東京）、皇室博物館（東京）がある。第十二に、軍事施設としては、海軍航空隊、金剛艦、海軍工廠（横須賀）がある。第十三に、景勝地としては中禅寺湖、華厳の滝、千畳閣がある。第十四に、公園としては、天王寺公園（大阪）、新宿御苑（東京）、上野公園（東京）、後樂園（東京）、大元公園、紅葉谷公園がある。

これら十四の分野、天皇、総督府、神社・寺院、朝鮮関連、繁華街、百貨店、農業、会社、大学、病院、博物館、図書館、軍事施設、景勝地、公園により、日本政府が日本の伝統文化と文明を誇示したかったことがわかる。

中でも注目されるのは11月5日に訪問した埼玉県の高麗神社である。ここは奈良時代に関東近辺にいた高句麗の遺民を現在の埼玉県日高市に移住させ、その際のリーダーである若光が亡くなったのちにその遺徳を偲ぶために作られた神社で、現在も続いている。当時の日本当局者がここを視察団の訪問地に選定したのは、朝鮮人の同化を進めるにあたり、奈良時代の高句麗遺民の姿が、朝鮮人同化の「生きた証拠」とされたためである。これについては筆者が2016年に論文を書いている(8)。

続いて教育機関に着目すると、大学で訪れているのは東京では東洋大学、京都では帝国大学（京都大学）の二校である。これだけ見ても、当時、日本当局が東洋大学に着目していたことがわかるが、その理由についてはのちに触れることにして、まずは訪問の様様を当時の資料をもとに再現する。

4. 東洋大学での歓迎会

1920年11月1日の午後、朝鮮の儒者たちが東洋大学を訪問し、歓迎会が催された。東洋大学から出席したのは<表3>の17名である。内

訳は、教授が11名、職員が6名である。教授については『東洋大学一覧』(1918年)をもとに担当科目を記した。

<表3> 歓迎会出席者

	職名	氏名	備考	9	教授	高桑駒吉	史学
1	学長	境野哲	仏教史	10	教授	沼波武夫	国文学
2	前学長	前田慧雲	仏教学	11	教授	小見清潭	漢文学
3	教授	土屋弘	漢文学	12	幹事	三輪政一	
4	教授	内田周平	支那哲学	13	幹事	郷白巖	
5	教授	東敬浩	漢文学	14	事務主任	内丸輝義	
6	教授	古城貞吉	漢文学	15	校友会	五十嵐光龍	委員長
7	教授	宇野哲人	支那哲学	16	校友会	田辺善知	副委員長
8	教授	柳宗悦	宗教哲学	17	東洋哲学	吉村幸夫	編輯主任

4-1. 内田周平「招邀朝鮮儒生記」に見る歓迎会の様子

招邀朝鮮儒生記

遠朝 内田周平

大正九年十月三十一日下午朝鮮儒生八人東京欲觀國光也余與東洋大學主事三輪君迎諸東館儒生凡二十五人尊卑之者曰申錫麟爲慶尙北道參與官爲東道者福島百藏爲大邱農學校長余乃介三輪君通刺於二人儒生外又有朝鮮總督府吏員韓人報館主韓合爲三十一人翌日東洋大學長境野君期上午十一時邀一行饗之於講堂余與同職土屋鳳洲古城垣堂小見清潭等先期至周旋堂上揭孔子畫像其左側凡上陳朝鮮古刻本數十部右側壁間展和漢名書畫二十餘幅以備覽觀是日儒生出神田客棧迂路而至以放過期而至時既下午也因徑延之宴席慶尙北道書記金秉泰達城郡書記金泳華京城日報館員洪木春及東京每夕新聞中央新聞中外日報萬通信員亦與焉主客共六十餘人余與鳳洲垣堂清潭等分進款後座定

<写真2> 内田周平「招邀朝鮮儒生記」(『東洋哲学』28-1)

與朝鮮儒林唱和詩

朝鮮諸名流觀光之次見訪我東洋大學喜賦此以述鄙懷大正九年庚申十一月一日也

觀光蓋客入東京欲託吟嘯慰旅情去海層瀾激騰壯駿駉積雪射眸明采歐元識非同種善衛從來是弟兄韓孟忘形我何暇唯期把臂話平生

八十齡 土屋 弘 拜具

謹次

土屋先生原韻奉呈

<写真3> 土屋弘(鳳洲)「与朝鮮儒林唱和詩」(『東洋哲学』28-1)

続いて歓迎会の模様を記した内田周平「招邀朝鮮儒生記（朝鮮儒生を迎えるの記）」を紹介する。これは漢文で記される（〈写真2〉）が、筆者が現代語にしたものを少しずつ区切って示す。

(1) 前日の出迎え

大正9年10月31日午後、朝鮮の儒生が東京に入った。私は東洋大学主事の三輪（政一）君と駅に迎えに行った。儒生は25人。引率者は申錫麟といい、慶尚北道の参与官である。案内するのは福島百蔵で大邱農業の校長である。私は三輪君を介して二人と名刺交換をした。儒生ほかに朝鮮総督府の役人、通訳者、新聞社主筆がおり、合計31名であった。

儒者たちが東洋大学を訪問する前日から記録が始まる。それによれば内田周平と三輪政一が東京駅に迎えに行く場面である。後述するが、三輪政一は当時、東洋大学幹事であり境野に次ぐ位置にあったと思われる。過去に朝鮮で日本語学校を運営しており、朝鮮の事情に詳しい。一行の中には朝鮮総督府の役人、通訳者、新聞社主筆がいた。この中、新聞社主筆とは、朝鮮の新聞『毎日申報』社長の加藤のことと思われる。

(2) 歓迎の準備

翌日、東洋大学学長・境野君は、午前11時に一行を迎え講堂で接待しようとした。私は同職である土屋鳳洲、古城貞吉、小見清潭などとともに準備をした。堂上には孔子の画像を掲げ、その左側の机の上には朝鮮の古い刊本を数十部並べた。右側の壁には和漢の名書画を20余幅展示して観覧に備えた。

ここには儒者たちを迎える歓迎の準備の様子が説かれる。担当したのは内田に加え、土屋、古城、小見であり、いずれも中国関係の学者である。場所は東洋大学の講堂である。ステージの上には儒者たちを迎えるべく孔子の肖像画を掲げ、左側の机には朝鮮の刊本を、右側の壁には和漢の名書画をかけている。この中、朝鮮の刊本は、内田の後に出る記述と儒者たちの記録から、李退溪註の『朱子行状』、日本で翻刻された退溪の『聖学十図』、『戊申封事』、『自省録』、柳西崖の『懲愆録』である。この中では李退溪の著作が多いことが注意される。後に内田は李退溪の子孫と交流する。

(3) 出迎え

この日、儒生は神田の旅館を出て、いろいろな場所を巡ったために到着が遅れ、着いた時には午後であった。慶尚北道書記の金秉泰、金泳華、京城日報記者の洪水春、東京毎夕新聞、中央新聞、中外日報、万通信の4社の人々も一緒であった。歓迎会の参加人数は合計60余名であった。私は土屋鳳洲、古城貞吉、小見清潭などとともに班を分けて接待した。

まず儒者たちの到着が遅れたことが記される。旅程表によれば、東洋大学訪問の前に靖国神社と遊就館を訪問している。視察団には、道書記が2名、4社の新聞記者4名も一緒であり、歓迎会の参加人数は60名を超えたという。ここで冒頭に掲げた<写真1>に写った人物を数えてみると51人が確認できる。そして会場では中国関係の教授が手分けして接待したことがわかる。

(4) 境野学長の乾杯と土屋鳳洲の漢詩

座席が定まり、境野学長が起って歓迎の意を述べた。それは簡潔で要を得たものであった。これに対して申君も起って答辞を述べた。それは詳しく懇切なものであった。洪水春が通訳をした。接待の酒食はみな中国の料理人が作ったものであり、美味しく分量も豊富であった。酒に進もうとした時、土屋鳳洲氏が（儒生をねぎらい、友好を述べる）漢詩を唱えた。申君もまた立って感謝を述べた。そして明日に土屋の漢詩の韻を踏んだ応答の漢詩を準備することを約束した。申君は、年は50に近く、断髪して洋服を着ている。その他は年のころ40から60で、みな厳然と旧式の衣服と冠を被っている。

境野の挨拶である。料理は中国の料理人ということから中華料理と思われる。そして土屋鳳洲による漢詩の朗誦が行われた。〈写真3〉視察団の中で団長の申錫麟だけが洋装で、残りは伝統の服装である。土屋鳳洲の漢詩は次のものである。

観光嘉客入東京。欲託吟毫慰旅情。玄海層瀾盪胸壯。駿峰積雪射眸明。米欧元識非同種。魯衛從來是弟兄。韓孟忘形我何敢。唯期把臂話平生。

（大意）大事なお客さんが観光のために東京に入った。私は旅情を慰めるために漢詩に託そうと思う。玄界灘の波は胸を洗い、富士山の雪は眸を刺した。（日本と朝鮮は、）欧米と同じ種族ではないことはわかっており、魯と衛のようにもとより兄弟の仲である。（唐代の詩人の）韓愈と孟郊はとても仲がよかったという。（そのように）われわれも交際したいものである。

これに対して申錫麟が呈した漢詩は次のものである。

今我朝天到帝京。満堂和気一家情。潤身道德為師表。華国文章際聖明。何論隔海限東北。恐致鬩牆傷弟兄。鬻舎難容真可楽。英材尽是魯諸生。

(大意) 私たちは帝都に到着した。今いる講堂には和やかな気が満ち家族であるかのような。(私たちは) 身を潤すに道德を師としてゐる。華国の文章は聖明に際だっている。どうして海を隔てて東北を限るのか (=日本と朝鮮を区別するのか)。(そうしていたら) おそらく兄弟同士の争いが起こるのであろう。東洋大学の校舎は狭いが、それは本当にすばらしい。優れた人材はみな魯の諸生(孔子の教えを継承する者)である。

(5) 同じテーブルに座った人の人物評

私は金鎮懿氏、尹弼五氏、金浩昌氏、趙学衍氏らと同じテーブルであった。金鎮懿氏は安東郡西後面金溪洞の人であり正三品である。大邱儒道振興会の掌議である。年は65で一行中の長老である。その10世祖先は鶴峰といい、かつて副使として江戸に来たことがある。尹弼五氏は従七位で大邱矯風会の会長である。詳しい出身などはわからない。金浩昌氏は義城郡点谷郡松内洞の人で、両班の名門である。前の面長である。面とは村という意味である。趙学衍氏は尚州郡尚州面仁鳳里の人で、また両班の名門である。大富豪であるという。私は左右を見まわして乾杯をしながら金鎮懿氏と筆談を行った。

ここでは同じテーブルになった金鎮懿、尹弼五、金浩昌、趙学衍についての人物が紹介される。金鎮懿は大邱儒道振興会の掌議であり、一行の中の長老であるという。同行者のリストを見ると、年齢は67歳の金暢鎮に次ぐ。その祖先である鶴峰は副使として来日したことがあるという。調べてみると、この鶴峰とは1590年に日本に通信副使として豊臣秀吉に朝鮮侵略の意図があるか否かを調べに行き、侵略しないであろうとの報告をした金誠一のことである。尹弼五は大邱矯風会の会長である。金浩昌、趙学衍は兩班の名門である。

(6) 李退溪の子孫との交流 (1)

福島校長が私のそばに来て、李退溪の子孫が一行の中にいることを告げた。私がお目にかかりたいというと、校長が彼のところに案内してくれた。その子孫の名前は中埜といい年は50前後である。彼は私を見てたいそう喜んだ。そして通訳を介して私に質問するに、「聞くところによれば、昔、玉水という人がいて、私の祖先（李退溪）の文集を刊行したといえます。その玉水とはどのような人でしょうか」と。私は筆談で答えた。「それは村士宗章^{すぐり}という人で彼の号が玉水です。江戸の優れた儒者で、その校訂刊行した『李退溪書抄』10巻と、『朱子書節要』はともに世の中に流通しています。私は李退溪の言行録を読み、ますます李退溪先生の学徳に感心しました。今、先生の子孫にお目にかかれて喜びに堪えません」というと、中埜氏は恐縮して感謝を述べた。

李退溪（1501-1570）は朝鮮時代を代表する儒学者であり、江戸時代の日本の儒学にも大きな影響を与えた。陶山書院を設立し後進の育成と儒学研究に尽力した。内田はその子孫である中埜と交流しているのであ

る。そして中埜が内田に、日本人で自分の祖先の文集を刊行した村士宗章について質問した。

村士宗章は村士玉水（すぐりぎょくすい）（1729-1776）で江戸時代中期の儒者である。稲葉迂斎に師事し、江戸で私塾をひらいた。備後福山藩につかえたともいう。門人に服部栗斎、岡田寒泉らがいる。名は宗章。字は行蔵。別号に一斎。姓は「むらじ」ともよむ。著作に「一斎先生雅言」「玉水文草」などがある。『李退溪書抄』の刊本は文化6年（1809）のものが残っている。

中埜が日本に来る前から村士宗章の『李退溪書抄』を知っていたのは、江戸時代にすでにその本が朝鮮の李退溪の子孫に伝わっていたからである。それは江戸時代の文化8年（1811）に、徳川11代将軍の家斉の就任を祝う朝鮮通信使として来日した使節が日本側から本書を贈られ、それが李退溪の子孫に伝わったものであるという（9）。

さらに内田は中埜に、自分が李退溪の書物を読んでおり、その子孫に会えて光栄であることを述べ、それを聞いた中埜は恐縮している。ここに儒教文化を通した、日韓の文化交流の姿を見ることができる。

（7）李退溪の子孫との交流（2）

私が机の上に並べたのは、朝鮮古書の退溪註の『朱子行状』および本邦で翻刻された退溪の『聖学十図』、『戊辰封事』、『自省録』などの書である。中埜氏は熱心にこれらを見ていた。翌日披露された、土屋氏の漢詩の韻を踏んだ漢詩の中で、中埜氏の詩に「祖先が聖学を図ることを拝覧した。この時、不肖に生まれたことを感じた」という句があった。

ここで机に並べたとは、ステージの上の孔子の肖像画の左側にあった

朝鮮古書であろう。それらの中、『聖学十図』、『戊辰封事』、『自省録』などの李退溪の代表作が並ぶ。自分の祖先の書物が日本で重視されていることを知り、中埜氏は興奮していたと思われる。それを証明するように、翌日の漢詩の中に自分のことを不肖と表現している(10)。

(8) 大邱について

中埜氏の出身は安東郡礼安面西部洞である。李退溪が建てた陶山精舎もまた同じ郡の陶山面にある。大邱からはそんなに遠くないという。振り返ってみると、慶尚北道は昔、新羅に属していた。新羅王子の天日槍(あめのひばこ)が帰化したのは垂仁天皇のころである。おもうに(慶尚北道は)韓国の中で日本と近く交流も古くからある。そして大邱は現在、慶尚北道の要衝の地である。また李退溪などが出てこの地を教化してきた。故に、長い年月が流れたが、家名は伝わり儒教が盛んであり、我々と交流している。彼らが作った団体は、「振道」、「矯風」という。その名前からその志がわかるではないか。しかし、こうした動きを他道の人々は邪道であると批判しているという。申君は日本語がわかり、また古今のことにも詳しいので、私と長話をし、意気投合した。

ここでは大邱の土地について、日本との交流があること、現代では慶尚北道の要衝であることなどが説かれる。そしてそこに「振道」、「矯風」などの名をつけた儒教団体が存在するが、それらは他の道から批判されているという。ここに保守的な大邱、慶尚北道と他道との違いが感じることができる。

(9) 散会にあたって

会合は夕方に散会した。別れるにあたり、境野学長は東洋大学が刊行した書物4種を、土屋鳳洲氏は自分の詩集を献呈した。私は申君には大正詩文1冊を贈り、李氏には碩水先生遺書1帙を贈った。

散会にあたり、東洋大学側から様々な贈り物が贈られた。境野学長が贈呈した書物は、①『老子通』、②『井上円了先生』、③『東洋大学一覽』、④『東洋哲学』である⁽¹¹⁾。土屋鳳洲が献呈した自分の詩集とは、『晚晴楼詩鈔』(1908年)である。最後に内田が申錫麟に贈呈した「大正詩文」とは、1910年代から20年代に存在した漢詩の雑誌のことと思われる。発行は雅文会。李氏とは李退溪の子孫の中増であろう。彼に贈った「碩水先生の遺書」とは、幕末から明治時代の儒者の楠本碩水(1832-1916)の『碩水先生遺書』と思われる。楠本碩水は、広瀬淡窓、佐藤一斎らに朱子学をまなび、肥前平戸藩の藩校維新館教授となり、維新後は大学少博士となる。明治14年に兄とともに郷里の長崎県針尾島で鳳鳴書院をひらいた。大正5年に逝去。名は孚嘉。字は吉甫。通称は謙三郎。著作に「聖学要領」「碩水文草」などがある。内田周平は五高にいた時に碩水のもとを訪れていたという。この『碩水先生遺書』は楠本会により編集され、大正7年に刊行されている。

以上、内田周平が記した記録を見てきた。ここから窺えるのは、中国学者として朝鮮儒教を尊敬していた内田が、その子孫に出会えたという感激である。当時の日本と朝鮮半島との関係を考えると、日本統治下に置かれていたわけであり、人によっては朝鮮の人々を下に見る人々もいたと思われるが、内田の記録からはそれは感じられない。そして、この歓迎会自体が、現代にも通じるような相手を尊重した形での文化交流の場であったことがわかる。

4-2. 儒者側の感想：『感想録』の東洋大学記事

続いて『感想録』の東洋大学記事を見る。これは漢文で記されているので現代語にした。

校舎が广大で生徒が2300名である。うち大学生600名の中、朝鮮人は30名である。中学生は800名、実業学校生徒は700名、幼稚園は200名である。大学長は境野哲、前学長文学博士・前田慧雲、教授・土屋弘、内田周平、東敬浩、古城貞吉、文学博士・宇野哲人、文学宗教学長・柳宗悦、文学士・高桑駒吉、文学博士・沼波武夫、小見清潭、幹事・三輪政一、郷白巖、事務主任・内丸輝義、教官会委員長・五十嵐光龍、同副委員長・田辺善知、東洋哲学編集主任・幸村幸夫、諸子が集会して歓迎し、親切の情と款厚の礼を施し、午餐の饗応があった。学長境野哲氏の挨拶の中、儒教振興に関する適切な言論あるにより、団長・申参与観の同情を表する答辞があった。当大学は漢文を主とし、壁上に孔子像を掛け、机の上にある書籍の中には朱子行状、戊申封事、李退溪先生の聖学十図および自省録、柳西崖先生の懲愆録がある。教授・土屋弘氏は経筵侍講官であり本学の教授も兼ねているが、学文が豊かで、年齢は70余歳である。教人不倦であり自分が著わした詩集一卷ずつを団員に寄贈し、一律を贈与したのに対して団員がこれに応えた。

これは事務的な記録が中心となっているが、「学長境野哲氏の挨拶の中、儒教振興に関する適切な言論あるにより、団長・申参与観の同情を表する答辞があった。」という部分には共感を覚えた部分があったと思われる。さらに土屋弘については天皇への進講を務めた人物ということが関心を持たれたと思われる、土屋に関する記録がある。

4-3. 新聞記事

最後にこの模様を報道した新聞記事を3本掲げる。一つは読売新聞、もう一つは韓国で刊行された毎日申報である。読売新聞（1920年11月2日付）では「融和の宴」と題され、次の記事がある。

小石川区東洋大学では朝鮮慶尚北道主催の下に来朝した儒林内地視察団一行三十名を昨日正午から自校講堂に招待、境野学長、前田、宇野両博士以下、数十名の教授出席して午餐を共にし団長慶尚北道参与官申錫麟氏、一行を代表して謝辞を述べたが、大に日鮮融和の実を挙げ主客共に歡を尽して午後四時散会した。一行は来る五日、日光に行き、十四日帰鮮する由。

続いて朝日新聞では「東洋大学に於ける朝鮮儒生歓迎」と題し、次の記事がある。

去る一日入京せる朝鮮儒生觀光団二十余名は、団長慶尚北道参与官申錫麟氏に率ゐられ随員一同と共に神田旭楼に投宿し、二日朝、宮城前にて一拝を遂げ、直に小石川東洋大学に於ける歓迎会に臨みたり。東洋大学にては、土屋弘、内田周平、宇野哲人、古城貞吉、東敬治、小見清潭等、漢文科諸教授を接待員とし、講堂内に朝鮮関係の図書を陳列して一行の展覽に供し、各新聞記者等七十余名と共に食卓に着き、境野学長の歓迎の辞に次ぎ申団長の謝辞あり、食後閑談交歡午後五時に及び、頗る一行の満足を買ひたりと。

最後に朝鮮で刊行された毎日申報（1920年11月3日付）は「本社長招待 宴に行った儒生団一行」として次の記事がある。

先月31日に東京に到着した慶北道庁主催の儒生団一行は、1日午

前 11 時から小石川の東洋大学の歓迎会に出席し主客席を共にし、境野学長の丁寧なる歓迎の言葉があり、それに対して申参与官の答辞があった。午餐に移り、様々な歓談を交換し、記念撮影をした後、解散したのは午後 4 時であった。出席者の中、土屋鳳洲、前田慧雲その他、有名なソンビ（筆者：韓国語で儒者の意）たちが集まり、近來稀に見る盛会であった。（後略）

5. なぜ東洋大学を訪問したか？

続いて、朝鮮儒者たちがなぜ東洋大学を訪問したかを考察する。これには 1) 井上円了が朝鮮総督府の囑託として朝鮮を巡回講演したこと、2) 当時、大学のナンバー 2 で、朝鮮通であった三輪政一が存在が関係すると思われる。これについては筆者が 2014 年に「まぼろしの東洋大学朝鮮分校」を発表しておりそこに詳しく書いているが、それをもとに整理する。

1918 年 5 月、当時、国民道德普及会会長であった井上円了は朝鮮総督府の囑託として朝鮮を巡回講演した。帰国後円了は、朝鮮に大学を作ることを提案した。これが東洋大学朝鮮分校構想の発端となる。

同年 6 月境野哲が第四代の東洋大学学長に就任した。境野が直面したのは大学昇格問題であった。これは文部省が大学令を出し、一定の条件を備えれば私立大学も国立大学と同じ地位になるというものであった。しかしその条件の一つが巨額の準備金を用意することであった。その一環として境野は朝鮮に土地の払い下げを計画した。ここでもう一つのファクター、三輪政一が登場する。三輪は恐らく東洋大学出身で、明治 30 年代に朝鮮に渡り日本語学校を経営していた。日韓併合前に帰国し、社会事業に従事すると同時に境野らが主導していた新仏教運動に参加する。やがて東洋大学の運営に参加するようになり 1919 年には実質的に

学長に次ぐナンバー 2 の地位に登る。三輪は境野の朝鮮土地払い下げに関連して、円了の遺志である東洋大学朝鮮分校構想を具体化させたと見られる。そして 1920 年 8 月、朝鮮総督府が東洋大学の分校設置の内諾を行った。それから 3 カ月後に朝鮮儒者たちが東洋大学を訪問しているのである。

ここから考えると、朝鮮儒者たちの東洋大学訪問の背景に、三輪による東洋大学朝鮮分校構想があった可能性が高いと思われる。以後、東洋大学と朝鮮の関係は活発になる。翌年の 1921 年 10 月には朝鮮慶尚北道第二次視察団 24 名が来校し歓迎会が開催された。さらに 1922 年の 4 月には朝鮮の江原道儒道闡明会内地視察団 32 名が来校し、5 月には朝鮮儒道大同学会主幹の崔永年が来校し、歓迎会が開催されている。

しかし 1923 年 5 月に起こった「大正 12 年の紛擾事件」以後、朝鮮とのつながりは見えなくなる。この事件は、境野学長がある幹事を解職したことに端を発し、これに反対する教授陣および校友が学長および三輪政一を激しく非難し、騒動につながった事件である。そして 6 月、過激派学生が学長室に乱入して境野と三輪を殴打し、両者は重傷を負った。これに対して文部省は境野の学長認可を取り消し、また三輪も東洋大学を去ることになった。

6. 結語

以上、1920 年の儒者たちの東洋大学訪問について見てきた。まとめると次のようになる。

第一に、儒者たちは朝鮮総督府が主導する内地視察の目的で来日し、その中で東洋大学も訪問した。

第二に、東洋大学で行われた歓迎会の様子は、内田周平の記録からうかがうことができた。すなわち、境野の挨拶と申錫麟の答辞、土屋の発題による漢詩の交換、食事の様子、内田と筆談した儒者、また李退溪の

子孫との交流、別れ際に献上した書籍などである。

第三に、内田の記録からは、朝鮮儒教の本場の人々との出会い、中でも日本でも著名であった李退溪の子孫と交流したことの喜びが伝わってくる。このように両国に共通する伝統文化を通じた交流があったことは注目される。

第四に、儒者たちが東洋大学を訪問した理由は、当時東洋大学ナンバー2で、朝鮮通であった三輪政一が関わっていることが推測された。すなわち円了の遺志であるとともに三輪の構想による東洋大学朝鮮分校構想が軌道に乗った時期であり、さらに東洋大学と朝鮮との関係が最も緊密であった時期であった。しかし「大正12年の紛擾事件」により境野と三輪が失脚すると、朝鮮とのつながりも見えなくなる。

今回は紙幅の関係で、1921年、22年の視察団については扱うことができなかったので別稿で取り上げることにする。

< 関連年表 >

西暦	和暦	東洋大学事項	一般事項
1910	明治43		8月 日韓併合
1918	大正7	5月 井上円了、朝鮮総督府の囑託として朝鮮を巡回講演し、朝鮮に対して日本への同化を訴える。帰国後、 <u>朝鮮大学の設立</u> を説く。 6月 境野哲（黄洋）、第4代学長に就任	9月 原敬総理就任
1919	大正8	1月 境野哲「東洋大学基本金募集趣意書」発表 この年、三輪政一、東洋大学幹事に就任 6月 井上円了、中国大連での講演中、死去	3月 朝鮮で3.1運動 8月 斎藤実朝鮮総督就任

1920	大正 9	5月 朝鮮留学生同窓会、新入学朝鮮学生の歓迎会開催 7月 「朝鮮総督府、東洋大学京城分校認可」報道(『朝日新聞』) →大学設置の内諾 11月 <u>朝鮮儒林内地観光団、東洋大学訪問</u>	
1921	大正 10	8月 「東洋大学分校設置計画」(『毎日申報』、『朝鮮日報』)→大学設置の承諾 10月 朝鮮慶尚北道第二次視察団(24名来校) 歓迎会開催	11月 原敬暗殺さる 高橋是清総理就任
1922	大正 11	1月 「慶農齋を移建して」(『東亜日報』) 柳宗悦が朝鮮を訪問、その目的の一つが東洋大学分校の土地調査 4月 <u>朝鮮江原道儒道闡明会内地視察団(32名)来校</u> 5月 <u>朝鮮儒道大同学会主幹・崔永年の歓迎会開催</u> 10月 境野哲、朝鮮各地視察(ただし朝鮮分校に言及せず)	
1923	大正 12	5月 「大正 12 年の紛擾事件」起こる。 6月 境野と三輪、過激学生から暴行受け負傷。 境野、学長認可取消。三輪も東洋大学を去る。	9月 関東大震災

* 本略年表は、『東洋大学百年史』のほか、参考文献に掲げた拙論をもとに作成した。

<参考文献>

1 一次資料

- 編者不詳『慶尚北道儒林内地視察感想録』（1920年）
内田周平「招邀朝鮮儒生記」『東洋哲学』（28-1、1921年1月）
土屋弘「与朝鮮儒林唱和詩」『東洋哲学』（28-1、1921年1月）

2 二次資料

- 姜東鎮『日本の朝鮮支配政策史研究——一九二〇年代を中心として』（東京大学出版会、1979年）
佐藤厚「井上円了の朝鮮巡講に関する資料」（『井上円了センター年報』23、2014年）
佐藤厚「まぼろしの東洋大学朝鮮分校」（『井上円了センター年報』23、2014年）
佐藤厚「近代の高麗神社」（『マテシス・ウニウエルサリス』18(1)、2016年）
チョソンウン「1920年代 植民地支配政策と日本視察団」（水曜歴史研究会『植民地同化政策と協力、そして認識』ドゥリメディア、2007年）
松田甲『日鮮史話』第六編（朝鮮総督府、1930年）

【註】

- (1) 佐藤厚「井上円了の朝鮮巡講に関する資料」（『井上円了センター年報』23、2014年）
- (2) 佐藤厚「100年前の東洋大学留学生、李鐘天—論文「仏教と哲学」と井上円了の思想—」（『国際哲学研究』4、2015年）
- (3) 佐藤厚「まぼろしの東洋大学朝鮮分校」（『井上円了センター年報』23、2014年）
- (4) チョソンウン「1920年代 植民地支配政策と日本視察団」（水曜歴史研究会『植民地同化政策と協力、そして認識』ドゥリメディア、2007年）pp. 178-190「1920年代日本視察団一覧表」
- (5) 姜東鎮『日本の朝鮮支配政策史研究——一九二〇年代を中心として』（東京大学出版会、1979年）p. 34
- (6) 同前
- (7) 同前、pp. 236-239
- (8) 佐藤厚「近代の高麗神社」（『マテシス・ウニウエルサリス』18(1)、2016年）
- (9) 松田甲『日鮮史話』第六編（朝鮮総督府、1930年）「日本にて飄刻せる

退溪の著書」、「村士玉水の李退溪書抄」を参照。

- (10) 「西風雲帆抵東京、濟濟青衿慰客情、諸子登庠皆俊秀、古經在案總文明、初筵秩秩為賓主、同種源源是弟兄、拜覽祖先罔聖学、此時尤感不肖生。」
『東洋哲学』28-1、1921年、p.34
- (11) 『東洋哲学』27-12（1920年）p50。①『老子通』は、中国明代の宰相であり文人でもあった沈一貫（1531-1615）が著わした『老子』の注釈書を、東洋大学でも講義した中国哲学者・根本通明（1822-1906）が1909年に刊行したものである。本書は中国では散逸し、日本の内閣文庫にだけ伝来していたものである。②『井上円了先生』は1919年6月に井上円了が急逝した後、円了を追悼するために東洋大学で刊行したもので、円了の年譜、著作一覧や円了と縁のあった人の思い出話が収録されている。③『東洋大学一覧』は、戦前に数年おきに刊行されていた大学の概要を記す冊子で、大学の沿革、理念、カリキュラム、講師陣、学生が記されている。④『東洋哲学』は1894年に刊行が開始された東洋大学の雑誌である。